

三朝温泉かわら版



平成23年3月
編集発行 三朝町商工会

三朝温泉に魅せられた人たち

山紫水明の静かな湯治場だった三朝温泉は、大正年間にはラジウム含有量が世界一と判明すると一躍脚光を浴び、文人墨客をはじめ、全国から多くの人が訪れるようになり、発展してきました。その中には意外な人々も三朝温泉に縁を持ち足跡を残しております。そのような人々を紹介しましょう。

其の五 小梁

昭和三十年頃、小梁さんという若者さんがいました。彼女は広島県の山間部から三朝へ来、踊りが上手でしたが、いつも夢みたことを話すので仲間から「夢ちゃん」と呼ばれていました。ある日お客にドライブに誘われ、瀬戸内海を見たときのこと「アレはアメリカですか」と島を指して言ったそうです。その世間を知らないウブなところに、その男性はコロリと参り、身請けをされたという事です。



芸者小梁

その「夢ちゃん」からイメージをふくらませ、脚本家早坂暁氏が三朝で滞在中に創作したのが「夢千代日記」なのです。最初は三朝温泉を舞台にテレビドラマ化する予定でしたが、モデルとなった人達が各々特定されるおそれがあるということで、湯村温泉が舞台になりました。

其の六 津川少将

「八甲田山雪中行軍」青森第五連隊長 (1861~1926)



津川少将

一九〇二年一月、青森歩兵第五連隊が八甲田山で雪中行軍中、二一〇名のうち一九九名の凍死者を出し、日本山岳史上最大の惨事となりました。これは日本とロシアがやがて戦争になるだろうとの想定で行われた訓練でしたが、第五連隊の行軍中の指揮の乱れから悲劇が生まれたと言われています。

その後、津川は日露戦争に参加して勲功を上げ、少将に昇進しました。退役後は三朝温泉に居を構え、私財を投じて旧上井駅〜三朝間にラッパ馬車を走らせたり、亡き部下の墓参をしながら地元の青少年に剣道や相撲を教えていました。津川の死後、その剣道場は当時の三朝村に寄付され、地区の公民館として利用されました。蛇足ながら、映画「八甲田山」で北大路欣也と対立する佐官を演じた三朝連太郎も戦後の一時期、三朝に住んでいました。

其の七 橋本独山

はしちとどくざん (1869~1938)



橋本独山

京都相国寺の管長橋本独山は三朝温泉での湯治で持病の神経痛が完治したことから、昭和二年温泉街を見下ろす山腹に南苑寺を建立しました。



植木等

た。富岡鉄斎を書画の師とし、多くの作品を残しています。また、三朝橋の親柱に独山に筆にちなむ銘が残っています。

1960年代、日本の高度成長期、クレイジーキャッツの一員としてテレビで大活躍し一躍国民的スターとなった植木等は、ミュージシャンとして、また、無責任男を演じるコメディアンとして活躍しましたが、後に性格俳優に転身、黒沢映画等に出演し人間味あふれる渋い脇役としての地位を固めました。

晩年は肺疾患を患い、三朝温泉にある岡山大学病院三朝医療センターで、年に数ヶ月治療に専念しながら舞台や映画への出演を続けました。入院中知り合った人々と親交を結び、病院の廃止が問題になったときには、陰ながら存続に尽力されたと言われています。

其の五 琴栞

(1940~2007) (佐渡ヶ嶽親方)



三國連太郎

倉吉市出身の第五三代横綱琴栞は、高校時代は柔道や投てき競技で知られていました。1959年に佐渡ヶ嶽部屋に入門し、順調に出世しましたが、小結のとき、横綱柏戸との対戦で足を骨折し、十両まで転落しました。そこで三朝温泉でリハビリしながら稽古を重ね見事復活、ぶちかましとのど輪で猛牛と恐れられ、32歳で横綱まで登りつめました。引退後は、佐渡ヶ嶽親方として琴欧州をはじめ大関3人や多くの幕内力士を育て、名伯楽として知られました。その榮譽をたたえ、倉吉市の名誉市民として、銅像が建っています。



琴栞銅像(倉吉市)

其の六 三國連太郎

みくにれんたろう (1923~)

「釣りバカ日誌」のスーさんをはじめ、「利休」「飢餓海峡」等の代表作で知られる名優三國連太郎(本名 佐藤政雄)は、終戦後中国から復員し、各地を転々としたが、一時期三朝温泉の知人宅に寄居し、県農業会に勤務していました。その頃、倉吉の写真館で撮られた写真がニューフェース募集中の「松竹」へ送られ、採用が決まりました。1951年、木下恵介監督の「善魔」の主役としてデビューし、その役名、三國連太郎が芸名になりました。



土門拳

其の七 土門拳

どもんけん (1909~1990)

「日本一の建築は？」と問われたら、三仏寺投入堂をあげるに躊躇しないだろう」と記した写真家土門拳は、何度も三朝温泉に宿泊し、三徳山の四季を撮りました。56歳のとき、1965年12月には国宝投入堂へ上り蔵王権現の撮影を行いました。脳出血の後遺症で右半身不随のため、急峻な崖をザイルをつけ、地元の人や弟子達10人にサポートされての登山でしたが、一度モシャッターを切ることなく下山した日もあり、同行者達は高名な写真家の目の厳しさに圧倒されたと言われます。

其の八 澤田廉三

さわだれんざう (1888~1970)



澤田廉三

鳥取県岩美町出身の外交官で、初代国連大使となった澤田廉三は、1956年の日本の国連加盟に力を尽くしました。妻の美喜は「三菱」創業者岩崎弥太郎の孫にあたり、混血の戦争孤児を救うため、エリザベスサンダーズホームを設立したことで知られ、孤児達を連れて毎夏岩美町で過ごしました。澤田は退官後度々三朝を訪れ、三朝温泉会館(現・プランナール)完成の時は、式典に招待されています。また、キュリー広場にあるキュリー夫人像の碑文は澤田の手によるものです。夫妻の墓は澤田の故郷岩美町にあります。

其の九 菅権彦

すがたてひこ (1878~1963)



【三徳山驟雨】(依山権岩崎所蔵)

四条派の画家、菅盛南の長男として鳥取に生まれた菅権彦は、脳卒中で倒れた父に代わり、少年時代から絵筆をとり、一家の生計を立てました。成長してからは、国学、漢学、有職故実等の研鑽を積み、風雅で軽妙洒落な筆で浪速風俗を描き、第一人者となりました。芸術院恩賜賞など多くの賞を受け、大阪名誉市民第一号となり、倉吉市の名誉市民第一号でもあります。戦時中は倉吉に疎開して制作を続け、三朝でも「神倉秋景図」等の作品を残しています。夫人は、明治の三名妓として知られた富田屋八千代で、晩年病を患ってからは、三朝温泉で湯治を続けました。